

一七、菜食主義者

ルクリユ兄弟（エリイとエリゼ）はいずれも菜食主義者であつた。私は生れながらの菜食主義者ともいえるように、魚はなまぐさいので嫌らい、肉類も餘り好きではなかつたので、ルクリユ家に六、七年間居る間も、菜食主義結構！で通つていた。英國のエドワード・カアペンター翁も菜食主義者で、私が四五回もあの山の家を訪問した際には、いつも菜食の御馳走であつた。しかし、時には何の御馳走もできないので、鶏卵など出すこともあつたが、私は、それも結構！と辭退せずに喰べた。ルクリユ家でも、私は百姓勞働をしていたので肉食の必要があるとして、時々少量のよい肉を喰べさせられた。同じ菜食主義者でもエリイとエリゼの間には實際の態度に可なりの相違があつた、と、ポール・ルクリユは書いている。茲に少しく彼の思い出を紹介しよう。

「エリイとエリゼとは菜食主義者であつたが、しかしその態度は全然異なつていた。兄の考えは反省によつて成り立つたのであるが、そのために友人のところなどで、晚餐に特に手数をかけたりすることは決して欲しなかつた。また肉食無しに生活し得るとは信じない私の母を餘り苦しめることも欲しなかつた。彼は肉汁のスープに眼を閉じ、また時に、何も言わずに肉を食うことも出来た。エリゼは之と反對で、一たび決定したら、總ての障礙を除去してそれを決行した。少くともクラリスが死んだ後はそれを勵行した。それに彼は非常に少量の榮養で満足した。殊に彼の生涯の最後の十年間は、彼と同年輩の人の普通量の四分の一も攝取しなかつた。三箇の干李か、又は少量の乳類か、又は若干のビスケットが一食分であつた。一片の砂糖で彼は數時間を支えたのである。エリゼは彼自身の意見に基いて菜食主義論を書き。エリイは古代人や近代人がこの問題に就いて書いたものを悉く研究した云々」

アメリカのジョゼフ・イシル (Joseph Isihill) 君が發行した豪華な『エリイ及びエリゼ・ルクリユ』という書物の中に『大血族』(The Great Kinship) と題するエリゼの文章が載つてゐる。それはエドワード・カアペンターが佛文から英譯したもので、曾てカ翁を訪問した時、私はカ翁

から、その譯文だけのリフレットを買つたことを記憶している。この文章の中に次のような句節がある。

「どんな進歩も、部分的退歩なしには成立し能わない。人間は増殖する、併しその増殖に於いて人間はその場所を替える。そして、前進の行爲に於いて、彼は既に占領していた地盤を喪失する。理想は次の如くであろう。文化せる人間が野蠻人の力を保持すること、それと同時にその熟練をも保持すること、更に四肢の完全なる均衡と、原始的健康と、道徳性の平靜と、生活の單純性と、諸動物や山野との親密さと、地球及びその全居住者との調和とを保有すること、是れである。しかしながら、曾て通則であつたことが、今は却て例外なのである。多くの實例がそれを證明する。……」

「……吾々の文明が、今日の如く極端に個人主義になり、分割せる所有權や夥多な家庭が存在する如く多くの對立小國に世界を分裂せしめる時、その最後の破産が宣言されねばならなくなつて、共同救助の爲に相互扶助に依存することが必要になるであろう時、友愛關係の追求が富の追求に取つて代り、その富が早晚充分に各人に保證されるであろう時、そして自然主義者の發奮によつて、チャーミングなもの、愛すべきもの、人間的なもの、更に屢々人間以上のもの

が、諸動物の本性の中に示されるであろう時、その時吾々は、先きに背後に遺棄された總ての種屬を想起して、それ等を學者や器械ではなく、眞の仲間とならしむべく努力せねばならぬ。原始人の研究は、現代の『法律秩序』人を解釋する爲に寄與するところがあつた。諸動物の習慣は生命の科學により深く突入すべく吾々を助けるであろう。そして此の世に對する吾々の知識と吾々の愛とを擴大するであろう。吾々をして待ち望ましめよ、森林の牝鹿が、吾々に出會い、彼女の黒い眼の視線に依て吾々の愛撫を得べく吾々に寄り來るであろう、その時を。小鳥が愛すべき婦人の肩に意氣揚々と止まり、自らの美しさを覺り、自分の方から友愛のキスを要求し來るであろうその時を。」

以上はこの文章の十分一にも當らない、一小部分に過ぎないが、エリゼの自然萬物に對する深い愛情は、遺憾なく表われているであろう。こうした全生物一族なりという感情の持主たるエリゼ・ルクリュは、自然に、眞に自然に、菜食主義者たらざるを得なかつたのである。私は歐洲放浪中に會つた多くの老先輩が、いずれも人道的で、實踐躬行的であるのに驚かされた。然るにポール・ルクリュ翁は、あの聖者中の聖者とも言わなければならないエリイ、エリゼ二人の兄弟が、なおその實踐に於て牧師ルクリュに及ばなかつた、と書いている。彼等の道徳生活の水準が、吾々のそれを

超えて、如何に高いかを想像して、私は自ら慚愧する。

一八、ブルウドン・ミルクリュ

「昭和六年五月十六日ルクリュ會に於ける談話の梗概」

バクニンやマルクスが直接にブルウドンの教を受けたことは歴史家の認めるところである。殊にバクニンはブルウドンを訪問して社會問題を論じ、夜を明かすことが幾度もあつたと言われる。然るに同じ佛蘭西人であつたルクリュはブルウドンと席を同じくしたことは無いように思われる。ルクリュ兄弟が漸く政治問題、社會問題に興味を持ち、叛逆運動に身を投じた時代になると、ブルウドンは或は投獄され、或は亡命したので、會見の機會が無かつたのであろう。しかしルクリュ兄弟殊にエリゼは青年時代から無政府思想を懷き、一八五一年のナポレオン三世のクー・デ・タに際して叛逆陰謀を企てた時は既に無政府主義者であつた、と傳記者ネットラウ(Netlau)は言つている。従つて思想上に於て、ルクリュは當時の第一人者であつたブルウドンの感化を受けて居たに相違ない。前に『社會思想』の章中に引用せる青年ルクリュの手記に「それは政府な

きことであり、秩序ということの最高表現たるアナルシイである」という一句があり、それは正しくブルウダンの句を引用したものであらう。

一八五一年の叛逆が失敗してエリイ及びエリゼの兄弟は英國に亡命した。彼等がロシアの有名な革命家ヘルツェンと知り合になつたのは思うにその時であつたらう。五三年にエリゼが北米に渡航した後、在英の兄エリイに送つた手紙中に「ヘルツェンに宜しく傳えてくれ、彼は好い男だ」という文句がある。

エリゼは兄とともに英國に亡命し、兄はアイルランドとロンドンとの間を往復して或る貴族の子弟達の教育を指導していたが、エリゼは、或る大地主が持てあましていた八十二町ばかりの土地を預つて、それを耕作改良しようと企てた。その勞苦が尋常一様のもでなかつたことは、彼が兄エリイに書き送つた手紙によく表明されている。しかるにエリゼはこれほど心身を打込んだ事業を放棄して北米に行き、また南米にも旅行した。固より無一物の亡命青年のことであるから非常な困難事であつたことは言うまでもない。抑も彼がこうした方針を採つたのは何故であつたか。彼がアイルランドで農耕を始めたのも此所で同志同胞の理想的共同生活を開始する意向であ

つたというから、更に自由な、更に廣大な土地を求めて渡米したものであらう。尤もその外になほ大きな慾望があつた。それは彼の知識的興味の中心となつていた地理研究のために多くの廣い天地、殊に新開地の事情に就て實見したいということであつた。彼は米國に於ても大きな農場に働き、そこでも自由自治的な理想村を建設しようとしたが、矢張り大成しないで一八五七年に歸佛した。理想農村は大成しなかつたが、しかしエリゼに採つて重大な收穫があつた。それは地理學的知識を廣めたと同時に、既に無政府主義者となつていた彼の眼を以つて北米合衆國南部に於ける黒奴の生活状態を具さに目撃したことであつた。彼が歸佛後一八五九年から六〇年に亘つて『兩世界評論』に掲載した『合衆國の奴隸』という文章が非常なセンセーションを世に起したのには即ち其の一結果であつた。かの南北戦争に際して、大統領リンカーンはルクリュに褒賞を送りたいと申し出たのであるが、ルクリュは單純にそれを謝絶した。

一八六四年には兄エリイ等が主唱で『勞働信用銀行』(Credit au Travail) が創立された。エリゼも非常な熱心を以つてこれを助け、資金募集に奔走した。そして各方面に多大の反響があつた。元より勞働階級解放の過渡的事業として彼等はこのことに従事したのであるが、しかし非常

な熱心と誠意とを以つてこれに没頭した。『アッソシエーション』(組合)という機關紙が発行され、エリイがたしかその主筆になつたと思う。次で『コーペレーション』(Cooperation)と改名し、エリゼも之を助けた。ネットラウの記するところによると、之れはカベエの思想に基くとのことであるが、『労働銀行』の思想には蓋しブルウドンの『人民銀行』の感化もあるように思われる。この事業は一八六八年までは可なりの盛況を以つて繼續していたが、資金が大部分貸付けられて固定してしまい、大難況に陥つた。當時エリイは西班牙革命を見舞うべく同地に赴いて居らず、主事であつたプリーツは清算を宣言するに至つた。再組織は行われたらしいが、此の事業が何時まで続いたか分らない。一八七〇年には普佛戦争が勃發しその翌年にはバリ・コムミュンが起り、ルクリュ兄弟はやがて瑞西に亡命することになつた。

一八六七年十月『歐洲聯邦』(Les Etats-Unis d'Europe)と云う國際的週刊新聞發行の計畫があり、各國の進歩思想家が集まつてこれに協力することになつた。バクニン、ナケ(Naquet)及びフォークト(Gustave Vogt)等の推薦によつてエリイ・ルクリュは佛國の主任記者たることを囑望された。當時はバクニンを中心としてルクリュ兄弟や其他多くの改革者達は『國際友愛會』

(フラテルニテ・アンテルナショナル)という秘密結社を組織していた。それは後に『社會民主主義國際同盟』となつたものである。

一八六八年九月『平和と自由の同盟』という國際的改革團體の第二回大會がベルリンに開かれた。此大會に於てショデニ(Chaudey)ルチニ(Lemonnier)等の多數派とルクリュ、バクニン等の小數派との間に激烈な論争が行われた。小數派は階級及び個人の平等化、換言すれば、萬人の出發點を平等ならしめること、を主張してブルジョア階級を排撃した。またルクリュはフェデラリズム(連合主義)の議案説明者として一場の演説をしたが、それは、『狂熱愛國者の古い祖國』や、封建的な『州』や、專制の道具たる『縣』や、中央集權の所産たるコムミュンやを破壊し去れば、残るものは個人で、その個人こそ意の合うものと團結すべきであり、そこでコムミュンや縣の代りに生産團體及びその團體の連合が造られねばならぬ、と主張するのであつた。そして、これはエリゼ・ルクリュが公に無政府主義の原理を説いた最初のものである。と言われる。この思想はブルウドンのフェデラリズムに大きな一歩を進めたものである。なぜなら、ブルウドンの連合は未だ州や縣に代わる『生産團體の連合』という新しい組織にまで想到していなかつたのである。ルクリュはこの大會の狀況を兄のエリイに書き送り、自分の演説はよかつたと自信を

以つて報じている。

この大會に於て、バクニンやルクリュの反對に立つた多數派の首脳であつたショデエはブルウ
ドンの遺言の執行者であり、ブルウドンの遺書『勞働階級の政治的能力』出版の任に當つた人だ
るが、この時は既にブルウドンの思想の承繼者たる權威を失つていた。

この大會終了後、ルクリュやバクニン等十八名は、その多數派の主張は、平和と自由とを實現
するに最も必要な階級の平等化を否定するもの故に、この同盟に留まるを得ずと宣言して脱會
した。

彼の第一國際勞働者協會に於てバクニンがマルクスと鬭争を開始したのはこの頃からである。

一八六七年までは、國際勞働者協會のブルウドン派は他の派よりも優勢であつたので、問題は起
らなかつたのであらう。

ここで少しく、ブルウドンの無政府主義と、バクニンのそれと、ルクリュのそれとを比較して
置く。

その間にはかなりのニュアンスの相違があるからである。

ブルウドンは無政府と言つたが、共產主義者ではなかつた。『共產主義者は活動も感情も持た
ないで岩礁に附着し密集したる蠅である』とまで共產主義を罵倒した。共產主義は自由の精神に
反するものである。共有は私有の變形に過ぎないもので同じく不公平だ、私有は強者をして
弱者を搾取せしめ、共產は弱者をして強者を搾取せしめる、と彼は言う。尤もブルウドンが反對
したのは強權的共產主義であつたことを忘れてはならない。そして彼は無制限の所有權に代える
に所持——利子、地代、賃賃を許さない所有權——を以つてした。

彼は政治組織に於て無政府を宣明した。また次いで連合主義を提唱した。そして自分の思想は
無政府に始まつて連合に歸着する、と言つた。しかしその連合は、從來の Kommun 郡縣の自
治的連合を意味するものであつた。

バクニンは各國民、各縣、各 Kommun の完全な自治獨立を唱え各個人の離合集散に完全な自
由を主張したが、その Kommun や、地方團體の組織内容を如何に考えたか、それは明かでない。

經濟組織に於て彼は共產主義でなく、またブルウドン流の所持説をも取らず、自らコレクチヴィストと稱した。その點はマルクス派とほぼ同様である。當時マルクス派は集産主義（コレクチヴィズム）と稱したのである。それは土地や資本や生産機關を社會の公有に歸し、消費物件は私有するといふので、大體マルクス主義に異ならないのである。唯だマルクス主義と異なる點は社會又は國家の統制方式にある。

しかるにルクリュになると、無政府にして且つ共產を主張し、社會組織の如きも、前に『平和と自由の同盟』大會に於ける演説の項に記した如く、國家、縣郡、コムミュンを排して、全然新しい生産團體とその連合を希望している。此の時から十年後に無政府主義運動に入つたクロボトキンの社會改造意見も全く此のルクリュの考えを承繼したもので、ブルウドンやバクニンやに一步を進めたのである。クロボトキンも、ルクリュも時にコムミュンの語を使用するが、それは現在のコムミュンとは全然性質の異なるものである。從來の如き地域的のものではなくて、職業的、または經濟的系列に基く自由集團という意味に用いるのである。

ネットラウの記するところによると、一八七五・六年頃になつて『個人労働の價値の如何なる

計算も不可能である。従つて斯くの如きこと（労働に應ずる分配）を企圖するのは專斷的、強權的な行爲である、即ち各人の必要が規準となるべきだ、という感情が各處に起つて來た『大思想全集』『無政府主義思想史』（二八二頁）即ち一切のものを無所有または共有にしようとするのである。

ネットラウは更に言う『一八七六年二月八日ベルン・セクションの要求によつて開かれた大會や、三月十八・九兩日のロオザンヌ會議の席上、この問題（共產主義の問題）が討議されることになつた……エリゼ・ルクリュはこの席場で一場の優れた演説を試み……無政府共產主義を認めて之を説明していたとのことであるが、彼のこの演説の原稿が残っていないのは遺憾である』一八七六年三月十九日ロオザンヌに行われた演説（ルクリュの）は、たしかに無政府共產主義を代表するものではあつたが、決して無政府集産主義を爾後廢物として破棄しようといふのでなかつた云々』

更にブルウドンとルクリュやバクニンとの相違は、ブルウドンが平和的改革を考えたと對してルクリュやバクニンが革命の必然にして必要なことを主張した點にある。なおブルウドンとバクニンとルクリュとを圖式に示せば

經濟組織

社會組織

手段

ブルウドン 私有(所持)

町、村、郡市の連合

平和的革命 人民銀行

バクニン 集産的

自由地域團體の連合

革命的

ルクリュ 共産的

經濟的系列の自由連合

革命的

以上の略記を以て三者間の微妙な相違がほぼ明らかになつたであらう。

以上によつて見ると無政府共産ということをも最先して唱えたのはエリゼ・ルクリュであつたらしく、ブルウドンの無政府主義の極めて固執したものであつたに比して、ルクリュの思想には多分に滋味を存し、無政府思想に復活の呼吸を吹込んだものと言えよう。

しかし、前にも述べて来た通り、ルクリュが種々なる意味に於てブルウドンの思想に感化せられたことは争うべからざることであり、パリ・コミユンの罪にて追放せられた畫家クルベ(ブルウドンの親友)と隣住して且つ親しかつたというから、間接ながらブルウドンを知ることが出来たであらう。

ルクリュはゴッドキンの愛讀者であつたというから、その方の感化も無視する譯には行かま

い。要するに彼は最初に無政府共産主義を確立した一人であり、この思想に崇高なる人道的精神を注入した一人である。一八七九年、クロボトキンが西歐に現われた時分には既に無政府共産思想は確立されていたのである。